

## 大暮山の大黒舞 (1)

お話 / 長岡清一郎さん (舞手)

### 〈大黒舞との出会い〉

大黒舞との出会いは 23 歳の時。日東ベストの大谷工場に勤務するようになって 2 年目。旅行の宴会で演し物をする事になり、たまたま同僚の武田光昭さん (寒河江市) が清助新田に伝わる大黒舞を舞える事が分かり、彼を師匠に習ったのが始まり。初めての舞は大好評だった。あれから 27 年にもなる。



### 〈舞の思い出〉

その後、話を聞きつけた同級生の結婚式や、町内の方の年祝いなど、いろんなお祝い事に呼ばれるようになった。最初は面白半分にはやっていたが、結婚祝いなどで頼まれた時に、「これはその人の「人生の門出」という大事な一コマだ」ということに気付き、そこから心を入れ替え、心を込めて舞うようになった。

思い出深い舞はいくつもある。山形市のホテルキャッスルで開催された国際交流のイベントではインドネシアの方が民俗舞踏を披露した時に、お返しに私が日本の舞いということやらせていただいた。終わったあとに笑顔で写真撮影をお願いされた。舞踏に国境はないと感じた瞬間だった。町の移動芸文祭では、民謡会の生歌、生演奏で舞った事もある。一昨年は、空気神社で開催された環境イベントでも舞った。途中で CD プレイヤーの電池がなくなって音楽なしでやったが、温暖化防止を祈願し意義のある舞いとなった。

なにしろ祝い事なので、なにがあっても絶対に止まらないと決めている。大きな舞台になったのは、日東ベストの 60 周年記念の総合文化祭。オープニングで 250 人を前に舞った。最も緊張したのは、私の師匠の武田さんの師匠の方と結婚式で偶然一緒になり交代で舞った時だった。合計すると、これまででおそらく 100 回以上は舞ったと思う。

### 〈演出〉

いつのまにか舞いだけではなく演出にもこだわるようになっていた。

いい発表の場になったのが、私も実行委員をしていた旧大暮山分校の白い紙ひこうき大会だった。ドライアイスや煙幕を焚き、登場の曲を流し、被り物もした。たくさんの紙の蝶も飛ばした。10 年の間に実に様々なことをやり、演出が進化していった。初めて参加した方は驚かれたと思うが、知っている方は、今か今かと待っていてくれたようだった。10 回の大会で 10 種類の演出を試みたことになる。一昨年の最終大会では 300 人以上の皆さんを前に舞わせていただいた。

### 〈衣装と小道具・大道具〉

おのずと衣装や小道具をそろえるようになった。衣装は、東京に住む叔母から京呉服等のきらびやかな端切れを送ってもらい、母に縫ってもらった。今の衣装は 3 着目になる。打ち出の小槌も、はじめは空き缶に色紙を貼り木の柄をつけた自前のものだった。背景にもこだわることもある。桜の木を作ったり、草を描いて立たせたり、四方に立てた笹竹にしめ縄を張ってみたり。昨年の大暮山分校感謝祭では、会社の廃材をいただいて、溶接して「光背」を作り背負った。

(2010 年 1 月取材 安藤竜二)



### 長岡清一郎 (ながおか・せいいちろう) 氏

昭和 34 年 (1959) 1 月生まれ。52 年日東ベスト株式会社に入社。  
57 年より大黒舞を始める。朝日町大暮山在住。